
インタビュー

一ノ瀬大輔先生（環境経済学）の教育と研究

話し手：一ノ瀬大輔（立教大学経済学部准教授・環境経済学）

聞き手：菊池雄太（立教大学経済学部准教授・ヨーロッパ経済史）

立教大学経済学部の教員は、それぞれに固有の研究領域をもち、経済学におけるさまざまな問題にアプローチしています。そして、講義やゼミなどでは、そうした研究のバックボーンに支えられた専門教育が提供されています。教育活動や研究活動における各々の取り組みを知ることは、異なる専門領域に属する教員同士の相互理解を深め、また学生にとっては、普通の授業からは知ることのできない大学教師＝研究者の側面に触れる機会になります。

本インタビューでは、環境経済学を専門とする一ノ瀬大輔先生に、ご自身の教育実践と研究実践についてお話をしてもらいました。（菊池）

環境経済学とは

——一ノ瀬先生が専門とする環境経済学とは、どのような学問ですか。

経済学の方法論を使って環境問題の分析を行う学問です。環境問題の多くは人々の経済活動が原因になっています。そのため、経済活動を分析するツールである経済学は環境問題を分析するために適した手法だと言えます。

——経済学の中での位置づけは、どのようなものでしょうか。

環境経済学は、応用経済学に分類されています。応用経済学には、他にはたとえば労働経済学や医療経済学などがあって、環境経済学はその中でも比較的最近生まれたものです。

——どのような手法で研究しているのですか。

主にミクロ経済学を使って分析しています。先ほど話したように環境問題を起こしているのは、消費者や企業などの経済主体の行動です。ミクロ経済学は個別の経済主体の行動原理を解明する、つまり経済主体がある行動をとるのはなぜなのかを明らかにしようとする学問分野なので、環境問題の解決にとって有用な分析のツールになります。具体的な環境問題について調査していると、なぜ消費者は環境に悪影響を及ぼす商品を買うのか、企業はなぜ環境によくない製品をつくったり、環境負荷の大きい生産プロセスを採用したりするのか、といった疑問が出てきますが、そのメカニズムが分かると、どのような政策をとれば環境にとってプラスになるような行動を経済主体にとらせることができるかが見えてきます。経済主体の行動原理について扱うミクロ経済学を使うと、そういった疑問に対するひとつの答えを得ることができるので、それを通じて政策の効果を分析したり、政策の設計を考えたりします。

— 現実の具体的な問題を直接的に解決しようとする、実践的な学問ですね。政策設計を考える、とのことですが、実際に政府と関係をもって研究を進めることはありますか。

省庁と連携して研究をすすめることは実際にあります。また、自治体の環境に関する審議会に委員として加わることもあります。

— 省庁との連携について具体的にはどのようなものがありますか。話せる範囲で教えてもらえるでしょうか。

いま進めているものだと環境省の公募型の研究プロジェクトがあります。これは、環境省が決めたテーマについて研究を実施するグループを募集するタイプのプロジェクトなのですが、研究の進め方について環境省の担当者と打ち合わせをしつつ、研究を進めている感じです。具体的には、廃棄物処理の効率化という課題に取り組んでいます。高齢化が進んでいる日本では、労働者が減少していくと言われていますが、廃棄物処理は労働集約的な部分があるので、高齢化が進む社会の中でどうすれば廃棄物処理を効率的に行うことができるのか、ということが問題になっています。私が参加しているプロジェクトではIoTやICTを用いることで、廃棄物処理を効率化できるかどうかを検証しています。

— 理論モデルを使ったアプローチで検証するわけですね。

理論モデルと実証的なアプローチの両方を用いて研究を進めています。たとえば、ICTを導入した際に廃棄物処理に関わる主体の行動がどのように変化するのかについては理論モデルを用いた分析をしようとして研究を進めています。また、同時にデータを統計的に分析する実証的

アプローチによって IOT や ICT を廃棄物処理に用いることの効率性を測定することも検討しています。

— 実際のデータを使うわけですよね。どのようにしてデータを集めているのですか。

基本的には省庁やその他の機関が公開しているデータを用います。また、ヒアリングを実施して現場の情報を集めたり、プロジェクト内で連携している機関からデータの提供を受けることもあります。

教育実践

— 教育について少し聞かせてください。「環境経済学」では、どのような授業をしているのでしょうか。

春学期と秋学期にそれぞれ環境経済学 1，環境経済学 2 という科目を担当しています。環境経済学 1 では、はじめに経済学自体の基礎的な理論について紹介し、そのうえで環境問題を扱う際に経済学の分析方法がどのように使えるのかを、あまり高度な数学は使わずに説明し、環境経済学の基本的な考え方を伝えようとしています。秋学期に開講している環境経済学 2 では、具体的な環境問題をいくつかとりあげ、それについて最初は理論を使わず、政府統計や新聞記事、歴史的な史料などを利用して環境問題の現状がどうなっているのか、これまでどのような環境問題が起きていたのか、などの話をします。その後、それを経済学の理論を用いて分析するとどうなるのかを紹介するという形式で講義を行っています。秋学期の科目では春学期に比べてより数学的な手法を用いるようになります。

— 具体的な環境問題はどのようなものですか。

温暖化やごみ問題、四大公害病などです。

— 四大公害病を、具体的にはどのように考察しているのですか。

最初に、なぜそういった問題が起こってしまったのかということ、当時の時代背景や実際に問題を起こした企業の性質に注目しながら説明をします。たとえば水俣病であれば、なぜ原因企業がそこに立地したのか、なぜ企業が引き起こした問題に対し適切な措置がなされなかったのかなどについて、当時の企業の状況や国の政策を含めて考えます。その上で、経済学のモ

デルを用いてその問題を分析するとどのようなことが分かるのかを説明しています。具体的な問題を紹介し、それを理論的に分析する、というのを交互に行っているというイメージです。

—専門的な事柄を初学者に教える際に工夫していることはありますか。

大学では、専門的な内容は積み重ね式に学ぶようになってきていると思います。ある授業でAを習い、次に別の授業ではAを使ってBに進む、という構造です。ただ、それがうまくいかない場合もありますし、知っていることを前提で話を進めると、ついていけなくなってしまう履修者がどうしても出てしまいます。そのためこの授業では、最初からきちんと勉強していれば、使われる知識は授業内ですべて説明されている、となるようにしています。また授業では環境経済学の内容そのものを知るという以上に、環境経済を用いると具体的にどのようなことができるのかという、学ぶ意義の部分を理解してもらうことを意識しています。

—ゼミではどのようなことをしていますか。

大きくふたつに分けられます。ひとつは、環境経済学を使って自分で研究ができるようになることを目標にした演習、もうひとつは、人前で話し、議論できるようになるためのトレーニングです。前者について具体的には、専門書や専門論文の輪読、グループで研究論文を書くということを行っています。後者については、ディベートや、新聞記事からトピックを選び発表する、といったことをしています。

—輪読はどのように行っていますか。一般的に言って、活発な輪読をするのは難しく、教員はみな頭を悩ませながら工夫をしているのではないかと思います。

たしかに学生が受け身になりやすく、難しいですよね。私も必ずしもうまくできていると自信をもって言えるわけではありません。ただ、輪読は大事で必要なものと思っています。輪読を通じて基礎的な知識を学ぶことがすべての研究活動の基礎になるからです。私のゼミでの輪読の基本的なやり方は、持ち回り式で発表する班と質問をする班に分かれ、専門書や専門論文を読むようにしています。その中で、できる限りゼミ生が主体的に文献を読むという形をつくらうとしています。輪読と並んでグループで研究論文を書くことをさせていますが、その活動とリンクさせて、実際に自分たちが論文を書くための能力をつけるための訓練として文献を読む意識をもってもらおうとしています。とくに、読む題材に学生が書いた優秀論文を選ぶと活発な輪読になるなと感じました。ゼミ生はこれから自分で論文を書かなければならないので、それを意識して読むからだと思っています。また、同じ大学生が書いたものなので、親近感と

同時に自分もやらなくてはと思う部分もあるようです。教科書的な本を読むよりは主体的に取り組んでいるという印象を受けます。

—学生優秀論文だと、どうしても内容に不完全な部分があると思いますが。

それも含めて読むようにすると、議論が広がります。この部分はこうするともっと良くなるのではないか、などの話もしています。

—ディベートのテーマはどのようなものを取りあげていますか。

できれば環境をテーマにしようとしています。それに限らず、ディベートがやりやすいテーマにしています。たとえば最近では、コンビニエンスストアの24時間営業の是非について議論しました。

大学進学から現在までの道のり

—どうしてこの道に進もうとしたのですか。

高校では理数科のコースに所属していましたが、理系の学問に興味もてず、浪人をしたときに文系に転向しました。ただ現役時代には主に理系科目の勉強をしていたので、試験自体は理系の方がどちらかという得意でした。それと社会科系の授業も好きだったので、数学受験ができて社会科系の内容も学べる経済学部を受験しようと決めました。

—いつから環境問題について関心をもち始めましたか。

もともと社会科系の科目が好きだったということもあり環境問題には大学入学前から関心があったのですが、それを研究のテーマにしようと思うようになった一番のきっかけは大学のゼミでした。大学で入りたいゼミを決めるとき、授業が面白かった先生のゼミという基準で選んだところ、その先生のテーマが環境経済学だったのです。ゼミで環境問題について学ぶうちに環境問題と経済学についてより詳しく学んでみたいと思うようになりました。さらに、ゼミで勉強しているうちに研究活動にも興味湧いてきて、その後、進路を考えるようになった頃には、民間企業に就職するにしても、研究をしたいなという気持ちになっていました。民間で研究をする場合には、研究所やコンサルタントなどの選択肢がありましたが、たまたま在学中にコンサルタントでアルバイトをする機会があり、とてもやりがいのある仕事だと感じました。

ただそれと同時に、自分には向いていないかもしれないと思う部分もありました。民間企業の場合、クライアントから委託を受けて研究を行うので、基本的にテーマがあらかじめ決められていて、それに合わせて研究を進めるという部分があると思います。なので、自分がやりたくて興味があるテーマの研究はあまりできないかなと、考えました。そのようなわけで民間ではなく、大学院へ進学する道を選びました。その後、修士課程から博士課程に進んで、研究職に就くことになりました。

—大学院ではどのようなコンセプトで研究を進めていきましたか。

指導教授がリサイクルや廃棄物を専門にしていたので、廃棄物問題をテーマにしていました。ただ、環境問題についてももちろん研究していたのですが、環境経済学とは違う分野にも興味を持つようになりました。環境問題というのは、誰かが別の誰かに悪い影響を与えている、ということなので、その構造は犯罪などの、社会のあらゆる不法行為にも当てはまるものだと考えるようになりました。なので、環境問題の解決というものを広く解釈すれば、それは不法行為をどうにかするという、法律的な分野にも関わってくると思うようになり、そちらの分野にも興味を持つようになっていきました。つまり、環境問題をテーマにしつつも、不法行為をどうにかする、という大きな枠組みを設定して、環境と経済と法律を合わせたようなアプローチを意識するようになりました。

そうなってくると、不法行為に対する対処の仕方、不法行為に対してどういう責任を課するのがよいのか、というような法的な発想が重要になってきます。これを環境問題に当てはめ、環境問題を起こした責任を誰にどうやって課するのか、ということ具体的に研究するようになっていました。

—廃棄物を出して環境に負荷をかけた、その責任の所在はどこにあって、それに対してどのように対応するのか……。

具体的には、廃棄物の不法投棄の問題を研究していたので、その責任の課し方はどのように設定しておくのが一番よいのか、それに加えて、不法行為を起こす原因は何なのか、というところを考える研究をしていました。

—なるほど。誰に対してどうやって課するのがベストの選択なのかを考えて制度設計をしておいて、環境問題を防いでいこうという。

そんな感じです。

他分野との共同研究の可能性

——意外と言ってよいか分かりませんが、一ノ瀬先生は歴史への関心が強く、インタビュアーの菊池と共同研究の可能性を探っています。なぜ歴史に関心があるのですか。

皆がそう考えているわけではないと思いますが、環境経済学では実際にあった問題が研究のベースにあって、なぜ、そのような問題が生じたのか、これからどのようにしてその問題を解決するのか、さらに、同じような問題が今後起きないようにするにはどうすればよいのかを考えていきます。その観点からすると、今起きている問題が重要なのももちろんですが、過去に起こった様々な事例を検討することにも大きな意味があります。どのような政策があったから失敗したのか、逆にどのような政策があったから改善したのかを見るのも、これからの環境政策を考えるうえで役に立つと個人的には思っています。

環境問題が昔はどうなっていたのか、当時の人びとはなぜ環境問題を起こすような行動をとっていたのか、それに対して当時どのような政策がとられ、それはどのような効果があったのか。昔はあったのに今はなくなってしまったような政策もあると思いますが、現在は存在しなくなったとは言っても、当時は何らかの背景から必要とされていたはずで、将来的には同じような政策が復活するかもしれない。そうしたことに興味があって、環境問題に関係する歴史文献を読むこともしています。実際に文献を読んでもと、人間は昔からあまり変わらず、同じような環境問題を起こしてきたように思えてきました。たとえば、古代メソポタミア文明では過剰な灌漑によって塩害が起きたと言われています。現代でも同じようなことが起こっています。なので、環境問題に対して何か対策を考えるときには、昔どうだったかということから入って、色々な事例を積み重ねることも大事だろうと思います。事例は多い方が良いです。

——たしかに人間の本質は似通っているところはあるかもしれないですね。ただ、歴史学で重視されるのは時代性で、それに地域性が加わる。つまり、人間を取り巻く政治的、経済的、社会的、文化的な条件は、時と場所によって相当異なっているという違いが前提になります。「歴史は繰り返す」という格言がありますが、むしろ「歴史の一回性」という観点をとることで、社会の多様な動き方をより良く理解しようとする。それによって、普遍的理論のみでは一概に説明できないところをあぶり出していく。今回のお話で言えば、現在だと不法の基準は明確ですが、たとえばイギリスで工業化が始まった当時はそうではなく、法的に何がどう不法なのかを決めるところから始まって、徐々に規制が形成されていく。

なるほど。

—だから、一ノ瀬先生が指摘した、ある政策が「当時は何らかの背景から必要とされたはず」というのは重要で、当時の文脈からどうして必要とされて、それがどのように変えられていったのかは、歴史分析の重要な対象です。

理論と歴史の共同作業は必要だと思いますね。歴史的な背景が分からなければ何も分からない。歴史を踏まえ理解した上で、今後どうしていくかという話につなげたい。

—歴史家としては、そうした言葉が聞けてとてもうれしいです。反対に経済史家は経済学の理論が絶対に必要です。それがなければ単なる史実の収集家で、社会学者にならない。

今後も情報交換をして、勉強を続けていきましょう。

(2019年11月27日 12時20分～13時20分 立教大学池袋キャンパス 一ノ瀬大輔研究室にて収録)